

和田開明
定節
編輯
小説

春雨文庫

第六號

上



A416
11

梅亭金鷲閣

和田定節編輯

開明
小説

春雨文庫

東京書肆文永堂

叙

今や文明の秋風化進歩は速くなる蒸
 汽車や中世以来如く人力車は二代と
 はづしく如く郵便脚車の時代は
 いかかくなれば諸般の論説を追い新し
 かる中子男女同格として唱へ出せし西
 洋風の傳播ゆゑ耶蘇者流より出るとは

なるん。茲一摺を同格と同賢し。男子と并べて近世の義女貞女孝女の類ひを挙げて春田文庫の寶物と做んとし。既に策六編に至り。然いあれども女子も男子の例と異り。其行い皆中在りて表に現はす。よ少きが故に美事善行と云ふ人の知るも稀なり。因て其記載する程に之

一しれた。一編毎に一稿の後を以て終り。卷乞の期に一違ひも元来女子は文なるを以て自ら雅いの長しきを固くそのと待許しあらんとを希む

江東の偶活

佐田散人誌



林部左
門大藏
村住居

松高
吟光



こつねを
小常芝居
茶屋
茶屋ふく
由りなう
挺涼の圖



八極小

んえんく

くくあも

一二軒

みきり

丁稚才

志

春雨文庫第六編卷之上

東京 和田定節著

○第二十一回

諸侯諸浪士勤王黨西國より駈付る藩士あれは
 関東より走上る幕臣ありて京師の日も増す混
 雑の機會不乗ト儲と得んとて國々よりも入り
 來る商人仲間職工連不四條通りの賑をひい何
 時不も覺えぬ程るりき然れを旅籠屋料理茶屋

食物見世へ取り分て人の出這り多き中不此處
へ下等の料理店酒へ五夕と辞せると無く飯の
半人前とも厭はず胡座立膝片祖ぎ君と呼あり
僕と言ふあり八公あれを熊公有りて代る銚子
不叩く手の最騒がしき片隅不鍋と掛とる火鉢
とべ膝と膝との間不居え外不一二種の肴と並
べ早十分不酔とるう小さる声不成るうと思ふ
と又忽ち不大声揚げ話しなぐらふ酒飲と居

るの松屋寅吉と同一道具屋仲間なる百足や三
八と言ふ者不て三八の寅吉の持し盃へ酒と次
るがら一夫りやア寅さんの手際不志ちやア間鈍
かつと打物がラリと投棄て去来や組んと捻ぢ倒
し取て押へると言ふ烈しい所が有りさうなる物
ちやア福人う向ふの苗字の様不横田不かつ轉じ
悴の思ひの於岩とモ徹すと遣らかりと仕舞とら
宜らう不寅 三 麥畑で田舎娘と口説やア志めへ

左様往ものう待宵不更ゆく鐘の声さけば飽ぬ
別もの鶏へののく成程さんぐ樂しんど後どか
ら待ぼうけと食ひ更ゆく夜の鐘の音と算へく
居るからえりやア別れの鶏への何でも無らう然が
其別れの鶏更ゆく鐘よりも意路不取ての仇敵
意地る根生の平で無しと言ふのへ人目の関
と言ふ奴サ夫して其関の役人と唱ふる者の第一
番が下女のお初小妹のお樂次が清兵衛の慈母

とこ供二人りさ相對で半日も居る様る事が有り
やア女の方で此方と捻伏て仕まふのどア畢竟男の
熱くるると言ふりのへ女が水と向け焚附るから
の事往昔ツから女不氣の移へ色事の出来と例へ
まア聞ねへ夫どけれども北野の境内の待ぶせるん
ぞと言ふるア夜で見ると麥畑の晝間よりへ四邊が
安心どろろ天の岩戸のお扉まであへ往ずとも山
葵樽酉油うちよると酸味噌で刺身ぐらみの御

馳走ちそうの當然あつらふまじの事ことぢやア後あへり寅とらへそこふ人ひとツの不思ふし
儀ぎありで今いまも話わしと通りとほり三晚さんばんも素矢すやと一ひとと記し
どから此處こゝぞと一番息いっばんいきひんでお岩いゝのてと取とると
お岩いゝも此方こゝのてと掴つかツとから初心しんしんに胸むねが惴ぞたり
何なんとて心しん中ちゆう只ただあはれ彼かの意風いふうと言いふ意氣いきなる
のが袷元あしもとから水みづと灌あぶせられと様やうふゾツクリ襲おそつて
來きとらと思おもふと後方うしろふまつくと現あらはれたる天狗てんこう
さぬが自己おのれの肩かたと引ひ掴つかんで否いなと言いふ程ほど投なつけ

とから此方こゝの天狗てんこうふつと知らしらず人の意路こゝろの邪よこします
る奴やつ了簡りょうかんならぬと疼いたさ残ご耐たえ起た上ありるが踏ふ
て居ゐと雪踏ゆきふみで難むづかしはけ様やうと為なると又また後方うしろふ天てん
狗こが現あらはれまつてん轉ころりと遣やられとので惜おしい場ば
どとん思おもひるが命いのちから逃にげ逃にげて來きとが鞍馬山くらまや
愛宕あひだかをくりごとと思おもつと北野きたのの山やまふも野のい天てん
狗こで自己おのれが山やまと汚けさうと為なるとみんごう岡焼餅おかのやきもち
とやうれとのぞ若わく彼處あそこで木きの根ねと枕まくらと出でけく

矢張り宜くつてで愛顧があるのう知らん一詰ら
へ事と言ふお前の御所持の股の天狗さなぢやア有
め人一「まア聞て呉祐人其位る所まで漕附て居て
癖い場所へ手が届くねとん残念な訳何とて為様い
有めへりエ三さん一夫りやア訳へ祐人とど一何様すりや
ア宜らう一些と荒療治どが清兵衛の身体の治りを
早く附て仕舞の廿一治りとい何様するのぞ一清兵衛
誰も知つて居る勤王家で十津川へ籠つて藤本鐵

石や幾野と伐と平野國臣の連中不違ひねへから
確呼るとは見届とうへ會津の守護職う桑名の所
司代り又へ見巡り組へ内々そのと成訴へりや清兵
衛へ直さま生捕れ後へお岩さんが家の隊長どか
ら水性勝て志どい箱根や荒井の関所へ有つても
人目の関へ拂つて同前何瀬人の女房を取るのぞり
先毒と食ふのと思へるけりやア成ら祐人毒と食へ
皿までへ神武以来極りの文々自己不為せりやア夫

が第一の近ちかとち天あま狗いぬさなふ投なられる氣き支しいの無ない
仕事しごとと言いふのごと一いつ成なり程ほどこりやア旨うめへごと勤きん王家きんの
連れん中ちゆうへ何なにれも暴あざむごから人ひとッ間ま違ちがと島しま田の左さ兵へい衛ゑど
の目め明あの文ぶん吉きちと見みと様やうな目め不ふ遇あせられるので空うつら然ら
まごと事ことへ出で来き後ご守しよ護ご職しやくり所しよ司し代だいり見み巡めぐり組ぐみの人ひと
不ふ宜よろい手て續つき無ならう一いつ新しん撰せん組ぐみと自おの己の居ゐる一
軒けんない隣とりの家うち不その其の隊長ちゆうの女に房ぼうの様やうな田とい者ものの
様やうな女に居ゐるが世よ間かんを弾たると見みえて極ごく密みつ々々然ぜんが

手て續つきと附つられ後ご事こと無ならう其その外わへ心こころ當あり無な
ど一いつ新しん撰せん組ぐみの隊長ちゆう長ちゆうら近きん藤とう勇ゆうどらう彼あの人ひとを
大おほさう強つよいと言いふがア後ごへ一いつ元げんの農ひやう夫ふうの子こどが
劍けん術じゆつが上じやう手てなので追お々々用もちひられ出い世せして新しん撰せん組ぐみ
の頭かしら不ふ成なりる位くらいどから鬼おに神がみ不ふも負まけぬどらうが女に不ふ
掛かると矢や張ちやうり愚ぐん弱じやくりものととんえる一いつ何なに故ゆゑ一いつ今いま
話わしと自おの己の家うちの傍そばに居ゐるお美み弥やさんが近きん藤とうと
何なにも馴なれぬ物もの語ごりと言いふのごと講かう譯やく師しあらう三さん日にち讀よみ

切りの廣告札と掛ける長さで或者くら聞とが鬼
の女房ふや鬼神が成との諺への通り素的滅法界
る女どぜ寅ブン異う誉こんどって當時の清兵衛の女
房後ふ終屋寅吉の妻とあるお岩さる程ふや往め
へお岩さんの御利益なら江戸の四ッ谷のお稲荷
さぬのへ聞て居るがお前の信心のお岩さんの何様
ふ尊いうまど知らねへくらお美弥さんと比較とす
る譯ふや往移人のナ夫どがそのお美弥さんとウト

近藤との馴染の自己とお岩さんと馴染と様と訳ふ
往めへ併後學の為と聞て遣う話して見せへ「笥棒
る手前の恍惚でも言やあめへ聞の成恩ふ掛られ
て耐るりのう「然がまア話して見移る自己の意路の助
けふ成る道往が無いとも言ねへ「長いので大人く
満尾まで聞て居るう「斯言出とからふや後へ引
ぬ七日七夜掛つても宜からさア話せ「まア一盃飲下
あくと次で有る酒とぐいと飲布「猪口と寅吉ふ指

三 備近藤勇と云美弥との馴染の初まりほど併所や
何く有漏覚えの角も有るから其了簡下聞居
給へ武藏國多摩川の中間ふ登戸の渡しと二子の
渡しの東の方ふ大藏村と呼ぶ木曾義仲の親帶刀
先生義賢の墓の有る村ぐあつて其村へ林部左門
と言ふ浪人者ぐ江戸うら引越し世帯を持とぐ左
門の由ある武士るので軍学へ山鹿流劍術へ一刀流
無念流真影流柳剛流の四流を極め山本勘助真

とくくへ竹中半兵衛ときへ寄うと言ふ程の豪傑ど
が貧の病ひの其上ふ真事の病ひふまで取り着れ刺
さへ女房と先達て一人の娘ふ介抱ささ微ふ月日
送りけりて此猪口の酒とぐびと飲り儲其林部左
門の娘と言ふのが自己の一軒おいて隣りふ居るお
美弥と呼ぶ女下是と一口ふ誓て仕舞と立を芍薬
居れ牡丹へ梅の匂ひと持せと別品愛敬へ翻れて
も甘口み見えぬ巖然と代物男ふ為れたまふ自

ら様の風ふう今の年としが廿二三にじさんどろろ大藏村おほくらむらみ居おと
時の十七八しちはちの菘つがひの花はなどど親おやと養やしなふふ為ため茶摘ちやつと養やしな
蠶田植さんとうち麥むぎここき稲いね蒔ま業わざの手傳てづかるるどどてて僅こづかるる日ひ雇やうの
賃銀ちんぎんととりりひ漸やうやく煙けむりりと立たてて仕合しあ一いつ日にち親おや左門さもんのの後あと
方かたへへままりり病やま疲つかれれるる背中そむらと徐々そくそく撫なりりるるががろろ今日けふ
少すこししお顔色かほいろが宜よろいい様さまで御座ございまいまけけろろ蕎麥そば搔か
と食たつつて御覽ごらんるるささるるお氣きの御座ございいまませんんりり名な
主ぬしささななから新前しんまへの粉こなの大おほささうう宜よろいいののと戴おほききままりり

と一いつ天氣てんきの穩たやすりり故ゆゑうう大分おほぶ心持こころもちの宜よろいいが何なにも欲ほうう無ないいか
ら夜食やじきの粥かゆでも拵しらへへて貫ぬくくるる貧富ひんふの時ときのままりり
合あせせ銘々めいめいの耳みみ朶たふふ在あるるといいひひるるぐぐろろ一いつや何なにが耳みみ朶た
でも左様さやう事こと明細めいさいでで困こまるる蛭あぶらのお汁じゆと食くふふややううみ
貝撮かいとまんで話はなして貫ぬひひててエエ夫それどどから自おの己ごが長ながいいと
言いて断とつつととアア併ありり最たつつと端折たんせつて演えんドドやうやう緒いとそ
の娘むすめの二十四にじゅうよ孝かう突つ驚おどぎぎやうやうててんんの親おや孝行かうかうで父ちち左門さもん
の肩かたと撫なつつて居ゐるところへへ一いつや御免ごめんるるささんん一いつお二人ふたり

ともお宅うると動也、こゝ這入り來りし、國定忠次の
子分の長脇指と呼ぶ博徒連で溝の口の紋三三子の
の重六登戸の權八あり是と見よお美弥の飛下出下
少の顔と知りたる者由お夫々お會譯せると彼の
三人の口と揃へ「お前さんの親孝行と感ト昨日の
雨の下り鮎と今日玉川で漁や」とうら親父さんお
上といと思ひ持て來や」とと籠み入れたる鮎と出
され元來此處らうらうらみて名の聞へたる元頼者ら

故其儘棄も置れ祐は左門のお美弥不言ひ附て酒肴
ると取りお遣んと為ると三人の押し止め「何々持の
儀る、我らぐ持参と為たりとて上り口お置
一升樽と竹の皮包とと三ツ四ツさし出すは兼て此お
美弥お酌どさせ酒と飲ん目論見ふて來りし者と
思われらう所で一盃次で呉ん祐へッ

○第二十二回

寅「アササ飲のへ止て其後編と話しぬ人ナ」其處るお

美弥と相てふ飲氣下来このどろろ三人るがう押
かけの酒宴酔が廻るとして拍子の相撲甚うと唄ひ
うけ果は美弥と捕えて三味線を弾て呉ると言
ひ出すと左門へ病ひの床ふ卧しても昔一堅氣の
武士ごから藝者や茶屋女の真似させぬと言
ふと三人が愚摺り出ー成程武士の娘ごから三
味線と弾て村の若い由の相てと為祐へいりとも
と夫ら左門先生へ兵法劍術の師範と做させ

ととるれを定て娘御ふもご教授で有とらうから
一試合願ひとい我々の千葉周作の門人イヤ拙者の
齋藤弥九郎の門人るど名乗りかけ食て掛る残
風の柳不請て居ても先頃名主へ客不往きてい琴三
味線胡弓などと弾るがう已とちあひ三味線と弾相て
とせぬと言ふ我怒りてみれを承知せず三味線と
弾て下せへるどと藝女や女太夫同前ふーえ失敬
だつと其替り劍術へ何様でも彼様でも言ひ出ー



お美^や弥^ち博
徒等と試
合す

とから願はずあけ置やせんと腕と捲り目と丸くして
左門が病床へ迫り掛り傍若無人の体と現しければ
左門も今いらしく無然りと御所望あるを娘も申
附未熟なれども劍術のお相てと致さすべし併驗
証人無ては細うき勝負にけがと一此義の如何るさ
るやと聞き溝口の紋三膝と進り一夫の拙者が致
さん左「否其許ふては御同伴の連るれを証ふ為
しがはし「いや我らも男あり味方ありとて偏頗の

いとさぬ「然あるべきが當然なれども此方ふては
請難しとの争ひより遂ふ三人が血鉢とも投出す
べき勢ひふ至りし時「其驗證人ふ拙者が立んと
言ひ「表の木戸押「明徐々ふ入り来る人と左門親
子へ又此奴ら仲間悪僕ららんと見れ此程
左門も從がひ軍学と講ふ来れる近藤勇なりけ
れを左門も美弥も思はず胸と撫さけり「自
巳も夫で胸と撫さけり新撰組の頭の近藤勇が来

のどろ一左様さく一^廣地獄下佛と言ふの^い其処^{そこ}りらどるア
夫^{それ}ら何様^{どう}一と自己^{おのり}が岩^{いわ}さん不惚^{ふれ}られと様^{やう}不
近藤^{こんどう}も美弥^{みや}と言^いふ娘^{むすめ}不惚^{ふれ}られと^三ア急^{せうごま}込^こむ
不聞^きく^きる夫^{それ}ら弥^{みや}本舞臺^{ほんぶたい}が劍術^{けんじゆつ}の試合^{しあひ}場^ばと
る^よと初太刀^{よさち}が美弥^{みや}の相^{あひ}て不^ふ出^でとの^らが二子^{ふたご}の重^{ちゆう}
六^む一^{いち}左門^{さもん}の貧乏^{びんぼう}一ても劍術^{けんじゆつ}の師範^{しはん}と為^なと^から
竹刀^{しやくとう}や面^{めん}こて^あり有^あとの^ら一^三左様^{さやう}さく^そ其^{そこ}処^{ちゆう}で重六^{ちゆうろく}が
長脇指^{ながわきさし}仲間^{なかいちま}で誓^{ちか}古^こと一と無念流^{むねんりゆう}の腕前^{うでまえ}この娘^{むすめ}

と徐々^{そつそつ}と撫倒^{なげおと}一和田美盛^{わだみせい}が巴御前^{はまごぜん}とせ^しめ^めと様^{やう}不^ふ為^な
て遣^やらんと思^{おも}ひ^お不^ふ立^{たち}合^あふ^お早^{はや}い^お美弥^{みや}の^ご為^{ため}不^ふ
頭上^{あたま}とボク^とと扣^くき^けれ^を可^{さん}残^{ねん}念^んと竹刀^{しやくとう}と捨^{すて}大^{おほ}
手^てと廣^{ひろ}げて組^{くみ}結^{むす}き掛^かる^お十^{じゅう}分^{ぶん}酒^{さけ}不^ふ醉^{まい}とれ^を足^{あし}元^{もと}踏^ふ
跟^{かかと}つく^{ところ}所^{ところ}と美弥^{みや}ハ^と身^みと寝^ねす^と重六^{ちゆうろく}ハ^{おの}れ^れが
カ^か不^ふ餘^{あま}され^て向^{むか}う^く嘯^{せう}と倒^{たお}れ^るサ^三夫^{おとこ}ぢ^やア^お美^み
弥^{みや}が^か大^{おほ}勝^{しょう}ぞ^と知^しれ^とと^三前^{まへ}が^き北^{きた}野^ので^あ扱^あられ^と様^{やう}不^ふ
重六^{ちゆうろく}が^{ころ}轉^{ころ}げ^との^どり^のヲ^三馬^ま鹿^かと^い言^いふ^に不^ふ籠^{かご}棒^{ぼう}ヲ^エ

三子^{ニサ}一為ると溝の口の紋三や登戸の權太が遺憾がり續い
て出りけふ美弥と立合ふとまると近藤勇が押し
止め二子の重六殿とやらと一試合為したれを既
ふ其許とちの言ひぶん^{そのゆく}立^{たち}り年往ぬ女の腕立の
譽^{ちか}ら事ふも思われ^{おも}れ^{おも}れ^{おも}れ^{おも}最^ももや美弥さんい^ひか引
込^こと有^あるべし其許^{そのゆく}ら達^{たち}て試合^{しあひ}が為^なしたく^く其^{その}が
相手^{あひて}仕^{つかまつ}らんとして遂^{つひ}に近藤勇と紋三權太らの
試合^{しあひ}となり^{なり}か^かバ勇^{いさむ}の此^{この}者^{もの}ら^ら打^{うち}懲^{ちやう}斯^する行^なひ

と為^なさせ^{させ}しと思^{おも}ふより滅^{めつ}多^た矢^や多^た来^らふ抑^{おさ}さのめし^しめで
三人^{さん}の博奕^{あそび}うち^{うち}の頭^{あたま}と抱^{かか}へて逃^{にげ}かへつと^とが彼^{あいつ}奴^{やつ}ら^らの
仲間^{ななま}が多^{おほ}いから仕返^{しえん}し^しらんぞ^ぞ来^くる事^{こと}も有^ある
との用心^{ようじん}みて其頃^{そのころ}近藤勇^{ちんどうゆう}の武者修行^{むしゃしやうぎやう}の身^みの何處^{いづこ}
と宿^{やど}と定め^{さだめ}無^なれ^れば博徒^{あそび}らの摸^{りやう}様^{やう}と見^みんが^があ^あ夫^{それ}
あり左門^{さもん}が家^{いえ}ふ足^{あし}と止^{とど}め左門^{さもん}の病^{やまひ}の少^{すこ}も快^{はや}き折^{せり}
へ軍法^{ぐんぽう}と學^{まな}び居^おる^るじ^じが遠^{とほ}くて近^{ちか}きりの^の男女^{なんによ}の
あひど阿美弥^{あみや}が近藤^{ちんどう}と好^{すい}と男^{をとこ}ぞと思^{おも}ふと近藤^{ちんどう}

由又阿美弥と好と女どと思ひ好と同志と言ふのど
から一ツアツンそりア堪らねへ手も無く自己と云岩さん
ど子一好とと好との引力て頓々好附て仕舞とい出
雲のお世話がひでも有うう彼是して居るうち林
部左門が眞土へ轉籍やらかゝるので無何時たり
の墮落夫婦とあり夫うう近藤勇がこの地へ来て
新撰組の頭と成とので内々呼び上せ自己の家の
一軒おいて隣へ置のさ然かゝ其勇と頼んで頼め

るのとい無が誠と明すと飲まぎて愚頭と捏ととき
二三度勇小突を食せられとく其処で些頭と檢
衣寅吉の鼻の先でつとと言ひ其処で頼と小往と
が出来迄への併勤王家と言ひ立あて奴さんと
生捕して仕舞と言ふ狂言の随分筋が通つて居る
から何が来て續き夜尋ね出して彼奴めと破落
してと言ふ時三八目とときとて袖と引ゆる寅吉
かゝると見かへると西國風の武士が四五人連ふて居

り込と酒と肴と詔らへとり

○る多唄泣くも かくも今仇なれ見染てぢりて遇とす時

やはひまらうに帯も解いで寝のトて供の浚ふ三味

線の文句も耳ふ入相の鐘へ只さ淋しさと微降る雨ふ

濡りぢり襟小頭ひ差いさく涙ふ潤む目とちりひ煙

草へ憂さ残忘れ草去来一ふく吞うやと煙管へ煙

草とはぎるぐらな梅へ思ひふ塞がる胸と撫ちりて

の獨語「ホニお隣りのおこの唄つてお在の文句の通り

不斗老と生麦の轉び寝からひふ増し御恩が深くな

り一日お目ふ掛らぬさ人悲しく思つて居とものヲ京

都へお立ふ成てから泣て暮して来と半年お顔へ寫

真で見ると斗ぢ苛ッとい其中ふも人出入りの多い松

下亭やゑ京都うら下ッてお在のお客も有て折々を

聞嬉しい噂ふ渡邊吉太郎と言ふ人へ年こそ若け

と此横濱の金武場といふ劔槍の誓古場の教授役

の中うら撰出されて京都見廻組お成とのごうり京

都へ往ても矢張劍術の教授かどぶ肩と双べる者
 の無い早業どが江戸ッてで男が美と来て居るから
 女が無暗不惚るので其方の劍おちつ骨が折ると
 言ふ評志んど杯との話しめりとも吉太郎さんの立
 の時何が親類でも料理茶屋など居て何程其身
 と正しく為ても濡衣を着せられる事の無いとも
 言れぬ故江戸の家へ帰つて仕舞ませうと申したら
 夫へ一應道理で自己も夫なら安心どが表向ふ未

ぐ貫ひ請と女房でい無し便り致為る譯み往ぬく矢
 張此處居て呉る方が宜左様為りや使ひと被来と
 書状と届



即ち料理

松平

と勝手うらてみ出来できると被仰かたやうとから夫それも左様さやうどと思おもひ家うちへ帰かえらずあ居ゐるに有あるて人ひとの噂うわさも話わさとも聞きれ又また敏としげ宗むねの郵ゆう便びんも戴かけ此方こちらから書かけても上あげられろく夫それの實まことも嬉うれしいけしども早はやく京きやう都とへ御おや役やく宅たくが出来できサア引越ひっこして来こいと言いて下くださる様やうも成なるさう嘸さぶ嬉うれしいと有あるが夫それも附つても一いち日にちくみ騷さわ々ざ増世ますよの中なか殊ことも京きやう都との勤王きんこう家うちとやらいの諸藩士しよはんしが集あつるので横濱よこはまより切きの張たるの多おほくつて戦争せんそうの支度しどをくりと聞きく若わ其様そのやうな事ことでも

始はじめると常々つねづねの御氣性ごきせうと言いひ又また人ひとも誉ほめられて居ゐるお身みで見みれば後あとへ引ひかず引ひきせず勝負しやうぶの時ときの運うんとやう木曾義きそぎ仲なや新田義貞しんたぎさだの様やうな強つよい大将たいしやう下くださる討死うちじと為なるからと思おもふと何程なんぢやう劍術けんじゆつも達たちたお在い下くだりも錢砲斗せんぱうとり流行世はやりよの中なか呼あ鳴ないやく考くわへれば考くわへる程ぢやう悲かなしく成なつて来きるむくり忘れ様わすれやうと為なると猶なほ々々思おもひ出でて泪なみだも瞼まなこが重おもくなるり塞ふさむ顔かほも赤あかて居ゐると又またお松まつさんやお竹たけさんも男おとこめられるから此表このおもてでも見みて氣きも晴はるさうやト客きやくの出入でいりの揚あげ

口ふ出で植込の常盤木や飛石傳ひ成て居る門の
外の往来と詠めて居ると旅人らうき風体の者が来か
り頻りふ内と覗き入れ點頭ながら這入来り
亭と言ふ料理茶屋の此町内での此方むろで御坐います
ト聞れる梅のハ手前一軒でございし夫下のハ私の京都
ら参つとのどぐふ内ふお梅さんと言ふお方の在る久ト言
れてお梅の胸まぐ裏を思はず知らず身と進め
が梅の梅でございし貴君のハ渡邊さんうろお往るすつ

不吉太郎様にお頼れ申しこの下直ふ江戸へ参るべき所一寸
お届物お寄り升と左様ある貴嬢がお梅さんう調度宜つ
と油紙包もと下「お手紙の中お這入て居るとのどちよ
うとお請取を願ひまじつお梅の案事の最中のたあり
飛立むりの嬉しさお奥へ忙々駈こもて請取と書持
来り茶煙草盆など出るるが「京都へ大さう騷
いと噂と致しますがア真正でございませう「此方
下申す様な物で御坐いません渡邊さん杯へ晝夜

着込の鎖繻絆くさりじょうばん附つどろーで鉢鐵ちちがねや武者草鞋むしやこぞうと
お放なましるさる様やうる事ことへ無い騒さわぎ取とりけ長州侯ちやうしゆこうの
勢いきなりひが盛大せいだいで松まつと折をりて萩はぎと植うゑるなど言いふ流行ちやうり
辞ことばと子供こどもるんぞが唄うたひ歩行あるく位ゐどかろ何瀬なんせ戦争いくさ
不ま為まらずあゝ濟すまますまのイヤ是こもヤア雨あめへ止やんどが
暗くらく成なて來きととい言いふ時とき天主堂てんしやうどうの時計とけいチヤンチヤン

春雨文庫第六編卷之上終

春雨文庫第六編卷之上終

010190509520

